

## 自身ができそうな被災地の農業再生について

僕に何ができるかを考えた時に、まず思ったのは、「知らなければならない」ということです。確かに、9月から放射線環境学の講義を聴き、ある程度の知識と状況を知ることは出来ました。しかし、この講義で得られたものというのは、あくまで各先生方の視点を介しての情報であり、多方面からのアプローチでありながらも、断片的なもの、まだ現実とギャップのあるもののように感じられました。僕の意欲の足りなさもあるのかとは思いますが、やはり座って先生の話聞く、という形式ではどうしても受け身になり、自分から何かを得ようという要素が不足してしまいます。そこで、本当に「知る」ためには、実際に現地に訪れる必要があると強く感じました。そもそもあまり他人に対して関心を持って生きてこなかった自身にとっては、そうすることなしでは、自分に何ができるのか、何をしたいのか、全く見えてこなかったのです。

その一方で、行かなくては何もできない、ということは今できる事が何かを考えるのを放棄しているのでは、とも感じます。何かを始めるには、やろうとも思わなかった新たな行動に挑戦することが不可欠です。といっても、いきなり東北に行く、というのはハードルが高くもあり、口先だけになってしまう可能性があります。そこでまず思いついたことは、スーパーで積極的に東北産の物を見る。そして、その作物に関する情報をちょっとでもいいからインターネットなどで見てみる。そうすることで、自身の生活と被災地とのギャップを埋めていく。このことを僕の被災地の農業再生への手助けの第一歩とします。ここまでが、今できると考えたことです。

では将来は何ができるのか。

僕は水圏生物科学専修に進学する予定です。といっても、まだ専門的な知識があるとは言えません。しかし、自身ができる農業再生を考えると、やはり自分の専門の知識を生かした活動をしたいと考えました。そこで一つ思いついたのが、植物プランクトンと放射性セシウム吸収の関係を調べることです。この放射線環境学の講義の中で、溜め池中には懸濁態の

放射性セシウムが多く含まれており、この懸濁態セシウムがイネに積極的に吸収される、と聴きました。そしてこの量というのは、セシウムサイクルという季節変動があり、冬の間はセシウムが多くなるということでした。この仕組みは講義中には説明されなかったのですが、あとで質問したところ、その冬の時期には対流が起こることにより栄養塩が全体に行き渡るため、植物プランクトンが生育して多く見られ、そしてその植物プランクトンがセシウムを吸収しているのではないかと、ということでした。その時期の溜め池の水は稲作には使われないため、あまり問題になっていないようでしたが、もし植物プランクトンがセシウムを効率的に吸収するとすれば、一例として、水を一度「植物プランクトン槽」なるものに通してやれば、セシウム濃度の低い水が得られるのでは、と考えました。ただし、海水中でのセシウムと植物プランクトンの関係はすでに調べられているようだったので、まずはその研究内容を学び、淡水における応用を考えたいです。

このようなことは、自身の少ない知識のもとで書いたことであり、内容のないものかもしれません。しかし、このレポートを出発点として、僕の被災地の農業再生に関わる行動をしていきます。冒頭に書いたように、まずは自身の生活と被災地とのギャップを埋め、そして被災地を訪れることにより、現地で必要とされていること、将来出来そうなことも見えてくるのではと思います。また、やりたいことが見つかったときに、十分に力を発揮できるよう、今は体力、知識共につけていくことが、さらなるひらめきや発想に繋がると考えます。